転生前のチュートリアルで異世界最強になりました。5

準備し過ぎて第二の人生はイージーモードです！

ALPHA LIGHT

小川悟
Ogawa Satoru

アルファライト文庫

CONTENTS

第1章　ドロテア騒動 ―― 007
第2章　王都へ ―― 167

I became the strongest in another world
in the tutorial during my lifetime.

登場人物紹介

ドロテア
魔法の腕は確かだが、
かなりのトラブルメイカー。
胸が大きい。
テンマ
33歳で命を落とし、
異世界に転生することになった
元ゲーマー。
ゲームの知識で
この世界を楽しみ尽くす。
ハル
食いしん坊な
ピクシードラゴン。
現代日本の知識を持つが、
感性は古め。
ミーシャ
冒険者に憧れ、
『開拓村』を出た狐耳少女。
研修に対して
かなりストイック。
ピピ
兎獣人の少女。
活発な性格で、
研修にもとても前向き。
シル
テンマの従魔である、
シルバーウルフの子供。
食いしん坊&甘えん坊。
アンナ
テンマの研修を
管理していた元女神。
神格を剥奪され、
テンマの仲間に。
ジジ
人族の少女。
泣き虫で不器用だが
頑張り屋。

第1章 ドロテア騒動

I became the strongest in another world
in the tutorial during my lifetime.

第1話　開発チート

俺、テンマは森の中で馬車を走らせている。
ついさっき仲間達とともにレンカ村という場所を発って、現在はラソーエ領へと向かっている最中だ。
とはいえ、ここに至るまでには色々と紆余曲折があったんだよな……。

日本にて三十三歳で命を落とした俺は、十四歳の少年の姿で異世界に転生させられた。
だが、転生先で簡単に死なないように三ヶ月の研修を受けなくてはならないという決まりがあるらしい。
それならばと研修を受け始めたのだが……それが終わったのはなんと十五年後。
しかし、その十五年が無駄だったかといえば、そうではない。
前世のゲーム知識を活かして工夫をし続けていたおかげで、俺のステータスが完全にチートじみた数値になったのだから。
そんな研修を終え、俺が放り出されたのは、テラスという名前の世界にある辺鄙な村・開拓村の付近。
俺は開拓村に身を寄せ、一ヶ月半くらいのんびりした生活を送っていたのだが、村に住む狐獣人の美少女・ミーシャに流され、なぜか冒険者になることに。
とはいえ色々な地を巡っていたわけではなく、しばらくは辺境の町・ロンダを拠点に活動していた。
そこに腰を落ち着けてしまった大きな理由の一つは、仲間が増えたことだろう。
人間族と兎獣人のハーフであるジジとピピ姉妹。国の中でも指折りの魔術師で、ロンダの魔術ギルドのギルドマスターを務めていた上に英雄とまで呼ばれるドロテアさん。そしてその姪孫でありロンダの領主であるアルベルトさんの娘のアーリン。
一癖も二癖もある彼女達と知り合い、頼まれごとをこなしたり一緒に遊んだりしているうちに、なんだか町を出にくくなっちゃったんだよな。
まぁ町に居着いたとは言ったって、複製出来る空間魔術――ディメンションエリアを用いて生成した、どこでも研修施設――D研内に建てたどこでも自宅内で過ごすことが多かった気はする。
その中にはプールも豪華な部屋もあるし、かなり便利。

だが、そのせいでこの間、アーリンがどこでも自宅に彼女と縁のある女性達を勝手に泊め続けるという事態が発生した。

どこでも自宅に滞在していたのは、アーリンの母親であるソフィア夫人、冒険者ギルドのマスターであるザンベルトさんの奥さんであるセリアさん、騎士団長のバロールさんの奥さんであるナールさん。見事に権力者ばかりだ。

とはいえ俺はそれをさほど重く受け止めていなかったのだが、周りは俺が激怒していると勘違いして……結果、かなりの大事になった。

その結果、何らかの罰を与えないと収拾がつかなくなってしまったんだけど……折角相手が権力者だしってことで、俺は騎士団の拡充や商業の強化といった、町を発展させるための施策を共有した上で、それに伴う煩雑な作業を任せた。

それからしばらくしてロンダの町はだいぶ発展したし、そろそろ色々な場所を巡りたいしってことで俺はロンダの町をあとにして、王都を目指すことにしたのだ。

「それにしても、折角ロンダを出たのに、なかなかのんびりと旅を楽しむってわけにはいかないなぁ。ただでさえロンダから王都へ向かう新たな道を作りながらだから大変なのに、トラブル続きで気が休まらない」

俺は思わずそう零す。

現状、王都へ向かうためにはロンダの北に隣接するコーバル領を経由しなければならない。

だが、ロンダ側から門を通る際には高い通行料を支払う必要がある。

加えて、コーバルを経由するルートは直線的ではないので、余分に時間もかかってしまう。

それらの問題を解決するべく、ロンダと王都を直線で結んだ際のちょうど中間辺りに位置するラソーエ領へ向かう道を作りながら、王都を目指しているのだ。

ちなみに二つの領地の間にはガロン川という幅の大きな川も流れているので、後々そこに橋を架ける必要もある。

そんなわけで道を作りながらの旅になっているのだが、さすがに道を作っていることはそこまで大っぴらにしていない。

異世界に来てからしばらくは自分のステータスの高さがバレないよう、自重しながら過ごしていたのだが、最近それをやめ、この世界を発展させようと決意した。

しかしそれでも敢えて目立とうとは思っていない。出来るだけ面倒ごとに巻き込まれないようにしたいという基本スタンスは変わっていない……はずだ。

だから作業は周囲の町や村の人々が寝静まったあとに、翌日進む分の道を作る、という感じ。

更には俺が異世界で得た知識を『知識の部屋』という場所に登録した際に使った偽名――テックスがその作業を行っていることにした。

今回の旅に連れてきた仲間は、ミーシャ、ジジピピ姉妹、ドロテアさん、彼女の元冒険者仲間のバルドーさん、シルバーウルフの従魔であるシル、ピクシードラゴンのハルだ。

あ、アンナさんも一緒ではある。

彼女は俺をこの異世界に送り込んだ元案内嬢。俺の研修が十五年間も続いたのは、実は彼女のミスが原因だ。で、それが問題になって天界を追われ、結局責任を取る意味で俺の眷属になった。

この世界の神であるテラス様に頼まれてそうしたけど、ずっと警戒され続けているから、仲間と呼べるかは微妙なところだが。

ちなみにアーリンは俺が作った道を辿るような形でアルベルトさんと一緒に後から王都へ向かうので、今はいない。

ドロテアさんが今回の旅に同行するのを許した理由の一つが、彼女がそのテックスではないかという噂が立っていること。上手いこと隠れ蓑にさせてもらっているわけだな。

そんなわけで矢面に立たなくてもいいのは助かるが、昼間も普通に活動している中で夜も休まらないので、結構疲れる。

それに加えて、休憩所ではハルを珍しがった商人達と揉めてしまうし、俺らがきっかけでコーバル領と戦争になりそうにもなった。

最終的に横柄に振る舞っていたコーバルの奴らが態度を改めてくれることになったので、ロンダにとっても良い結果になっただろうから結果オーライではあったんだけど。

そんな感じでこれまでの道中はトラブル続きではあったが、作業に関してはこれからの方が楽になるだろう。

ロンダ領とラソーエ領の中間に位置する村、レンカ村に辿り着くまでは、元あった道を整備するような形だった。だが、それ以降は未開の地。山を切り開きつつ道を作ることになる。

そう聞くと、より過酷そうに思えるだろうが、周囲の目を気にせずチート能力を振るえるので、むしろ俺としてはやりやすい。

誰かに見られる心配がないから、昼間にも作業を進められるし。

ちなみに今日は、商人がラソーエ領を目指す際に立ち寄る中継地を作る予定の場所まで進むのを目標にしている。

おっと、そんなことを考えている間に、道の果てに到着したようだ。

生い茂る木々の手前で馬車を停め、ジジに御者を代わってもらい、ミーシャ、シル、ハルには木々の中に潜む魔物を狩ってくるように言う。

ミーシャは剣を抜くと笑顔で走りだし、シルはそれに続くように小躍りで茂みの中に

入っていく。ハルは嫌そうな顔を俺に向けてブツブツと文句を言っているみたいだが、断ればデザートや食事が減らされると分かっているのだろう、結局素直に茂みの中へと飛んでいった。

俺は地図スキルで近くにいた魔物の反応が次々と消えていくのを確認しつつ、作業を始める。

まず土魔法で道を作る予定の場所一帯の木を根っこから引き抜いてはアイテムボックスに収納し、抉れた地面を土魔法で固めていく。

それから、なるべく平坦な道にした方が移動しやすいため上り坂は削り、下り坂は埋める。

そして魔物除けの魔導具を地面に埋めてから、舗装した。

また、三キロごとにトイレと、馬車を何台か停められるスペースを設け、十五キロ進んだところには大きな広場も作った。水飲み場もあるし、食事するためのテーブルや椅子なんかもある。

そこまで作業すると、ちょうど昼時になっていた。

作ったばかりの広場で昼飯を食べ、また作業を再開する。

ここからはバルドーさんにも魔物の間引きに参加してもらう。

バルドーさんは暗殺を得意としていて、仕事の処理能力もかなり高くとても優秀だ。

ロンダを発展させる際にも助けられたが……いかんせん、キケンな趣味の持ち主でもある。

ただ、戦闘の腕は確かなのでミーシャやピピの指導をお願いしているんだよな。

そんなバルドーさんも加わったことでより魔物を倒す速度は上がったのだが、森の奥に進むにつれて魔物の数も増え、強くなっていく。

ただ倒すだけなら問題ないけど、俺が道を作るペースに追いついていないな……。

というわけで、ピピも参加させることにした。

俺が開発した『テンマ式研修』という育成法は、レベルが低い状態で鍛えまくった方が効果が出やすいため、ピピには魔物を倒させないようにしていたのだが……やむなしだろう。

とはいえせめて交戦させる機会を減らそうってことで、ピピはバルドーさんの指導の下、索敵を中心に働いてもらった。

予定より早く目標としていた場所の付近まで来た。

俺は他のメンバーをD研から呼んでくる。

D研の扉は同時に二個以上は出しておけないが、一つであれば任意の場所に設置しておけるので、今は馬車の中に設置してあるのだ。

「テンマ、あれはなんじゃ？」

D研から出てきたドロテアさんが、そう質問してくる。
彼女が指差す先には、高さ四メートルほどの石造りの外壁があった。
「え～と、新しく造った村の外壁だけど？　まだ村の中身は作れていないけど、ゆくゆくはここをラソーエへ向かう際の中継地点にしようと思ってね」
「そうではない！　なんで道もない森の中に、あんな物があるのじゃ！」
「テンマ様が事前に外壁だけを造っておいたのですよ。明日から建物の製作に入る予定です。ただ予想以上に敷地が広いですね……」
バルドーさんが俺の代わりにそう答えてくれた。だが、最後の方は少し心配そうな口調。
ロンダの開発が予定より早く進んだので、バルドーさんと相談して『王都への旅が楽になるように中継地にする予定の村の外壁くらいはあらかじめ造っておこう』という話になった。
フライでここまで飛んできて、ざっくり魔物を狩り、外壁を建てたんだけど……確かにバルドーさんと相談していたより敷地は広くしてしまったな。
まぁ別に使われていない土地だったし、いいでしょ。
「それに、あれはなんじゃ？」
次にドロテアさんが指差したのは、外壁の更に奥。
この村（仮）の向こう側には山や丘が連なっており、その中を突っ切る形でトンネルを

作った。
「あれは、私も聞いていませんねぇ」
バルドーさんもトンネルを眺めながら、不思議そうに呟いた。
「あれは、土魔法で穴を開けて作ったトンネルですよ。とはいえ邪魔になりそうな箇所だけトンネルを掘って通れるようにしただけです。このトンネルだって三十メートルほどですし」
計画ではあの岩山を迂回するように道を作るという話だった。
でも、それだと直進するのに比べ、三倍ほどの距離になってしまう。
それだけの長さの道を作るより、トンネルを掘った方が簡単だという判断だ。
その方が後々この道を通る人だって楽だろうし。
「テンマ様は非常識の塊ですなぁ」
「本当にそうじゃ！」
バルドーさんとドロテアさんから返ってきたのは、呆れたような言葉だった。
ドロテアさんはともかく、バルドーさんには褒められると思っていただけに、ちょっともやもやする。
『平地を通って遠回りするとコーバルの領地の近くを通らなければなりません。あの辺りは領地の境があやふやだから揉めてしまわないか心配なんですよねぇ』って以前、バル

ドーさんが言っていた。
その問題だって、山の中を通れば解決するというのに！
これはちょっと一言言っておきたい！
そう思い、口を開きかけたところで――
『ねえねえ、お腹が空いたんだけど！』
『ぼくもぉ！』
食いしん坊のハルとシルが、空腹を訴えてくる。
ちなみにハルは元々念話で話せたが、シルは俺が作った魔導具の機能で念話が使えるようになったんだよな。
やむなく外壁の中に馬車を停め、どこでも自宅に入って食事をすることにした。

第2話　アンナさんと

食事を食べ終わり、お茶を飲みながら明日の予定についてみんなに共有する。

「明日は、この村を人が住める状態にするため、色々と動いていければと考えているんだ。まずドロテアさんは、村作りを手伝ってほしい。あと、他のメンバーは周辺の魔物を狩ってくれるかな。安全を確保するために、近くの魔物を極力減らしておきたい。頼んだよ」
ハルは面倒臭そうにしているが、それ以外特に反対らしきリアクションはない。
少しして、ドロテアさんがニヤッとしながら口を開く。
「私はテンマと二人っきりで共同作業じゃな」
その言い方はどうなんだ？　なんて思いながらジト目を向けていると、ジジが聞いてくる。
「わ、私も狩りをするんですか？」
「ああ、ごめん、ジジとアンナさんはD研でいつものように過ごしていてくれ。ピピはどうする？」
「私はミーシャお姉ちゃんと師匠と一緒に行く！」
え～と、いつからバルドーさんを『師匠』と呼ぶようになったのかな？
そんな疑問が浮かぶが、別に今聞くべきことでもない。俺は「そっか、気を付けてね」とピピに言ってから、改めてみんなの顔を見回す。
「まあ、今日はゆっくり休んでくれ。ああ、それとアンナさんは少し話があるから一緒に来てくれないかな？」

アンナさんとは一度きちんと話をしないといけないと思っていた。
警戒され、睨まれ続けるのは、正直辛い！
っていうかそもそも、そうされる理由に心当たりがないし。
「テンマ、夜伽なら私が先じゃぞ！」
相も変わらずのドロテア節である。
はあ、なんで夜伽の話になるのやら……あれ、なんかみんな俺を見ている？
もしかして俺がアンナさんにそんなことをすると思っているのだろうか。
少々げんなりしながら、俺は言う。
「アンナさんとは、ただ話をするだけですよ」
「なら、ここで話せばよいではないか？」
ドロテアさんはそう言うが、テラス様の話なんか、ここで出来るかぁー！
それになんでアンナさんが睨んでくるんだ‼　誰のために気を遣っていると――
バンッ！
俺は手の平をテーブルに打ち付けた。
「なんでお前がそんな顔で、俺を睨むんだ！」
俺はアンナさんを睨みつけながら、怒りをぶつける。
彼女は悔しそうに下唇を噛みしめながら、頭を下げてきた。

「申し訳ありません」
「私が余計なことを言ったのじゃ。すまん」
ドロテアさんがしおらしく謝ってきたが、今彼女は悪くない。
「これはアンナさんと俺の話です。口出しはやめてください！」
珍しくドロテアさんが焦っている。
しかし俺の怒りの原因であるアンナさんは、まだ俺を睨んできやがる。
「ふぅ～、分かったよ」
俺が冷静になったと思ったのか、みんなホッとした表情になった。
「頼まれごとだからってアンナさんを連れてきたけど、我慢の限界だ！　ここで別れよう。それで良いな？」
すると、アンナさんはようやく焦ったように謝ってくる。
「そ、それは困ります！　どうか、どうかお許しください！」
「テンマ、私が悪かったのじゃ。アンナを――」
「俺は何と言いました？」
ドロテアさんの話を遮るようにして、俺は尋ねた。
さっきこの話には首を突っ込むなと釘を刺したばかりなのに、なんで分からないんだ。
しかし、尚もドロテアさんが何か言おうとするので、俺は語気を強くして言う。

「これ以上口を出すなら、ドロテアさんともお別れです」
冗談ではないと分かったのか、ドロテアさんは唾を呑み、黙り込んだ。
俺はそれを確認してから、アンナさんに向き直る。
「別に俺を好きになれとは言いませんが、理由も分からず睨まれるのは納得出来ないし、これからもずっと一緒に行動するのは辛いです。せめて理由を聞いて解決出来ればと思ったんですが、そんな俺を、あなたは睨んでくるんですね？」
「そ、それは――」
「話し合いすら成立しない相手と一緒に行動出来ない。これが俺の結論です！」
「ま、待って――」
「ああ、言い忘れてました。さすがになんのケアもなく放り出さないので、安心してください。ロンダの町で生活出来るようにアルベルトさんに頼むつもりです。ロンダへも送っていきますし」
「お願いします。あの方にお叱りを受けてしまいます。どうか、どうか！」
アンナさんはそう言いながら、土下座する。
しかし、『分かればいいんです。それじゃあ一緒に旅をしましょう』とはならない。
「あのお方が誰を指すのかは分かりませんが、その人は俺に嫌がらせをしろと言ったんですか？」

「いえ、そのようなことは……」
アンナさんは消え入るような声でそう答えた。
俺は怒鳴る。
「だったらなんで俺を睨むんだよ！」
すると、意外なところから声が上がる。
「テ、テンマ様！　私はその理由について、聞いています」
えっ、ジジが理由を知っているの⁉
俺が驚いて振り返ると、ジジは続ける。
「契約魔法か隷属魔法みたいなものの影響で、アンナさんはテンマ様に逆らえないんだそうです。それで……無理やりエッチなことをされるのではと、怖がっているようでした」
はあ～、何それ。俺がそんなことをすると思っていたのかよ！
「俺は無理やり女性にそんなことをするような人間じゃない！」
「はい、私もそう説明したのですが……」
申し訳なさそうに言うジジに続いて、アンナさんは不貞腐れたような態度で口を開く。
「だって……だって、最初は私の同行を断ったのに、性奴隷にして構わないと言われてすぐに受け入れたから……」
確かに性奴隷の話が出て、アンナさんをじっくり足元から頭の先までじっくりと見

て……そのあとに受け入れたのは確かだ。
でも性奴隷にしようと思って受け入れたわけじゃなくて、偶然で……。
「い、いや、それは勘違いだよ！　断ったらまずいと言われたから……」
あ、あれ？　みんなの視線が冷たい気がするぅ。
アンナさんは涙目で叫ぶ。
「好きに命令して良いと言われて、態度がまるっきり変わったじゃない！」
俺が悪かったのぉーーー！
みんなの視線が冷たい。言い訳を、言い訳を……。
「ごめんなさい」
謝るしかなかった。でもせめて俺の言い分も聞いてほしい。
「でも、でも、でも、男なら綺麗な女性がいたら無意識に見ちゃうし、無理やりエッチなことをしようとは思ってないし、そんな勇気なんかないし……でも、ごめんなさい」
先ほどまで抱いていた怒りは霧散した。
どころか、悲しい男の性と無理やり向き合わされ、落ち込んでしまう。
「テンマよ、だから私がその思いの丈を受け止めてやるのじゃ」
今はそんなドロテアさんのおふざけ発言が刺さってしまう。
くっ、殺してくれぇーーーーー！

内心泣きそうになっていると、アンナさんが言う。
「いえ、中途半端な気持ちでテンマ様に償おうと思っていた私が悪いのです。でも……決心がつくまで、もう少し、もう少しだけお待ちください！」
いやいやいや、そんな決心しなくて良いからぁ。
ほら、ジジが目に涙を溜めちゃってるじゃん。
「アンナ、安心するが良い！　私が一手に引き受けるのじゃ！」
「そんなのはダメです！　そ、そ、それなら、わ、わ、私が……」
ドロテアさんに続いてジジも気を遣って名乗り出ようとしてくれているみたいだが、頭から湯気が出そうなくらい顔が真っ赤になっている。
「なんでしたら、私も一肌脱ぎましょうか？」
バルドーさーーーーん！　そ・れ・は・マジで要りませんからぁ！
収拾が付かなくなってしまったので、「とりあえず解散！」とだけ告げて、シルと一緒に逃げるように自室に向かう俺だった。

◇　◇　◇　◇

翌朝。俺らはどこでも自宅のダイニングで、全員揃って朝食を摂っている。

昨晩は遅くまでシルモフしたことでモフモフ成分をたっぷり充電出来た。だから睡眠時間こそ短かったけど、肉体的にも精神的にもスッキリしている。

シルは少し疲れているようにも見えるが……。

ちなみに、アンナさんもスッキリとした表情をしている。変に俺を警戒する素振りもない。

それどころか、生気に満ちた目をしている気がする。

だが、本当の意味で彼女の憂いを取り払うために、もう一つやらねばならないことがある。

朝食が終わると、俺は台所でジジと一緒に食器を洗っているアンナさんに話しかける。

「アンナさん、こちらに来てもらえますか？」

「はい」

俺はアンナさんの目を見ながら命令する。

「あなたは俺からのエッチな要求に対して、自分の意思で抵抗、拒絶しなさい。また、この命令を俺が撤回、変更しようとした場合、それも自分の意思で断りなさい。これは命令です」

アンナさんが突然のことに驚いているようだったから、説明する。

「アンナさんの意思が尊重されるように命令したつもりだけど、これで大丈夫かな？」

「は、はいっ、問題ありません！　で、でも、よろしいのしょうか？」

うん、嬉しそうだね……。でも当然だよな。

自分の意思とは関係なく、エッチなことをされるのは誰だって嫌だろうし。

「もちろんだよ。最初からエッチな要求をするつもりなんてなかったけど、こうした方が安心出来るでしょ？」

「あ、ありがとうございます‼」

感謝してくれるのは嬉しいけど、涙を浮かべるほど嫌だったのかぁ。

そう少し落ち込んでいると、ドロテアさんがひょっこり顔を出す。

「しかし、自分の意思で拒絶しなければエッチなことを出来るんじゃのぉ」

くっ、変なところで勘が鋭い！　微妙なスケベ心を見透かされてしまった！

「そ、そんな、そんなつもりではなく……自由意思を尊重した結果……」

言い訳がましくなってしまったぁ！

「はい！　ご期待に応えられるように、頑張ります！」

アンナさん、そうじゃねぇーーー！

ジジ、そこで涙ぐまないでくれぇ～。

それにしてもそもそもアンナさんは……何歳なんだ？

見た目は二十代後半くらいに見えるけど、元女神だと考えると、人とは違う速度で老け

ていきそうだ。
「ちなみにアンナさんの年齢っていくつなの？」
そんなふうに口に出してから、女性に年齢を聞くのはまずかったか？　なんて気付く。
しかし、アンナさんは気分を害した様子もなく答えてくれる。
「八千三百二十九歳です」
ま、待て！　これ自分で聞いておいてなんだが、アンナさんの身の上がバレてしまうんじゃ……。
「ふふふっ、アンナでも冗談を言うのじゃなぁ」
ドロテアさんが冗談だと捉えてくれたようでよかった。
そう思っていると、アンナさんもやらかしに気付いたようで取り繕うように言う。
「いえ、本当に、あっ、いえ……十九歳？」
さすがにサバを読み過ぎだぁ！　そしてなんで疑問形⁉
俺は視線を天井に遣りながら呟く。
「確か二十四歳ぐらいって言ってなかったっけ～？　自分の年齢を忘れるなんて、お茶目だなぁ」
「えっ、あっ、二十四歳です！」
ドロテアさんがジト目で俺を見ている気がするが、気にしない気にしない！

俺は誤魔化すように咳払いして、宣言する。
「それでは予定通り、それぞれの作業を始めよう！」

第３話　中継地を作ろう！

バルドーさんやミーシャ達が周辺の魔物を狩りに出かけるのを見送ったので、俺らも作業を始めるとするか。
「テンマ、二人の共同作業は何から始めるのじゃ？」
ウキウキした様子でドロテアさんが聞いてくるが、『二人の共同作業』という言葉は無視して、淡々と説明する。
「ここは宿場町となる予定です。将来的には周りを開拓して発展させていく可能性もありますが、今からそんな先のことを考えても仕方ありません。ひとまずドロテアさんは道路を平らに均して固めてください。俺は建物を作ります」
「ま、待つのじゃ！　土魔術は苦手なのじゃ。もっと違う――」

「ドロテアさんって、細かい魔法は苦手ですよね。森の中で魔物を狩ってもらうにしても、この前みたいに魔力を込め過ぎてドッカーンと森を破壊されたら困ります」
前に一度だけ一緒に狩りに行ったことがあるのだが、ドロテアさんは森の一部を火魔術で灰にしてしまった。
それ以降彼女に狩りをさせることはなくなったのだが、これを機に繊細な魔力操作を覚えてほしい。そういう意図があって、今回一緒に作業することにしたのだ。
「そ、そんなことはないのじゃ！」
露骨に目が泳いでいるな。
「ドロテアさんは魔力量に比べて、魔力操作のレベルが低いと思うんですよねぇ」
「そ、それは……」
やっぱり、ドロテアさんは押しに弱いな！
俺は更に言う。
「苦手な土魔術を丁寧に使う中で、魔力操作のレベルが上がると思うんですよねぇ。ドロテアさんなら出来ると信じていたんですけど、残念だなぁ～」
「信じてる……任せるのじゃ！」
そう言うと、ドロテアさんは走っていって、作業を始める。
ドロテアさんはチョロいなぁ。

普段『夜伽をするのじゃ！』なんて迫ってくるドロテアさんだが、強気で押し倒したら、涙目で『許してほしいのじゃ、冗談のつもりだったのじゃ！』なんて言ってきそうだよなぁ。
そう思うと、ニヤニヤが止まらない。
「テンマも仕事をするのじゃー！」
ドロテアさんに怒られてしまったので、俺も作業を始めることにした。

◇　◇　◇　◇

少し日が翳り始めた頃、俺は予定通り村の建物を完成させた。
地盤を固めて、用意した石のブロックを組み、最後に土魔術で固定する。
もう、何度同じ作業をしてきたのか分からない。
部屋を区切るのはアルベルトさん達に任せれば良いので、俺が作るのは家の大枠だけ。
故に、それほど大変でもない。
続いて、道を作るときに抜いた木を魔法で乾燥させ、製材する。
この作業も何度もしてきたので、あっという間だ。
さて、作業が一段落したのでドロテアさんに頼んだ道の具合を確認しながら、彼女の元

へ向かおう。
最初の方に作業したであろう地面は少し凸凹しているが、途中から随分とマシになっている。
土魔術か魔力操作のレベルが上がったのかもしれないな。
そうしてしばらく歩いた先で、ドロテアさんを見つけた。
その周辺は、更に上手く舗装されているな。
スキルごとに素質というものがある。SSSが最大プラス補正。SS、S、A、Bがあれば、相応のプラス補正がかかり、Cが補正なし。D、E、F、G、Hはマイナス補正で、Hが最大マイナス補正となる。補正が強いほどそのスキルは得やすい。
また、種族素質というものもある。種族素質は高ければ高いほど各能力値の初期値やスキル素質が高くなるのだ。
ドロテアさんは魔術スキルの適性が軒並み高いし、種族素質も高い。
そのため上達がかなり速かったのだろう。
でもドロテアさんが強くなったら、襲われたときに貞操を守り切れるのだろうか……身震いしてしまう。
そんなことをしている間に、俺に気付いたドロテアさんが嬉しそうに走ってくる。
「テンマァーーー！」

胸はバルンバルン。だけど、無邪気な子供のような笑みを浮かべた顔には泥の跡が。
か、可愛いじゃねえかぁーーー！
くっ、これがあるから……ドロテアさんを突き放せないんだよぉーーー！
「テンマの言う通り、土魔術や魔力操作のレベルが上がったのじゃ！」
「よ、よかったですね……」
魔術の上達を喜ぶドロテアさんの表情は、大人な体つきに反してあどけなく、大変可愛らしい。
ヤバい！　それでもドロテアさんは六十歳、六十歳、六十歳！
「お兄ちゃーーーん！」
落ち着くために心の中で呪文を唱えていたら、ピピが背中に飛びついてきた。
「や、やあ、ピピ、お帰り」
「ただいまー！」
た、助かったぁぁぁ！
純真なピピの声を聞いて、どうにか心は平静を取り戻した。
胸を撫で下ろしながら、ピピを体の前に移動させる。
血だらけの幼女ぉーーーーー！
あまりにもスプラッタなピピの姿を見て、思わず叫びそうになる。

「ピピ、今日もがんばったのー」
可愛らしいピピの笑顔も、血だらけだとホラーだ……。
絶句していると、バルドーさんの声がする。
「ピピ、先に血を落とさないと、テンマ様が驚いてしまうよ」
「ごめんなさい、師匠！」
バルドーさんはピピに何を教えているのだろう……不安だ。
すると、更に遅れてやってきたミーシャもニコニコしながら言う。
「むふぅ、二日で種族レベルが2上がった！」
ドヤ顔で言うミーシャを鑑定すると、確かに種族レベルが10から12になっている。
それに伴いステータスも全体的に上がっていて、特に素早さは二割以上も増加していた。
「ミーシャさんは現時点で冒険者レベルで言うとBランク程度の実力があります。レベル20までいけば、余裕でAランク冒険者になれるのではないでしょうか」
「むふぅ！」
バルドーさんの説明を受けて、ミーシャは更に鼻息を荒くする。
お前はどこに向かってるんだ？　いや、そうなるように俺が研修を始めたんだけどさ……。
出会った当時のただの村娘だった彼女を思い出し、なんだか複雑な気持ちになってしまうのだった。

第４話　膝枕

翌日、ドロテアさんは引き続き道路の整備に対してやる気を燃やしている。
魔術が上達すると分かり、前向きになってくれたようだ。
ミーシャ達も引き続きバルドーさんの指導の元、魔物を狩り続けている。
まあ、バルドーさんは魔物を狩らせることより、ピピとミーシャを鍛えるのが目的な気がするが。
そんな中俺は、どこでも自宅のリビングでソファに寝っ転がり、だらだらと過ごしていた。
すると、段々瞼が重くなってくる。
このまま寝てしまおうかと思っていると、ジジがお茶を運んで来た。
「テンマ様は少し頑張り過ぎです。もっと休んだ方が良いですよ」
いつも癒してくれるシルはミーシャとともに魔物の間引きに行ってしまったけど、ジジがいた。

うーん、なんだか眠たいし、ちょうどいいやぁ。
「ジジ、膝枕をしてほしいなぁ」
「えっ！」
目を見開いて固まるジジ。微睡んでいた俺の頭が瞬間、少し覚醒する。
うわぁ、寝ぼけていたのもあって、甘え過ぎてしまった⁉
そんなふうに焦っていると――
「よ、よろしくお願いしましゅ」
ジジは、恥ずかしそうにしながらも受け入れてくれた。
恥じらうあまり噛んでしまっているのが、なんとも可愛らしい。
俺は早速、横に腰を下ろしてくれたジジの太腿に頭を乗せる。
ジジは緊張して強張っているようで、足が少し硬い。だけど……。
「はぁ～、癒されるなぁ～」
自然と呟いてしまった。すると緊張がほぐれたのか、優しい声でジジは言う。
「さっきも言いましたが、テンマ様は頑張り過ぎです。たまにはゆっくりと体を休めて下さい」
ジジはそれから、俺の頭を優しく撫で始める。
その感触があまりに心地良くて、段々と意識が遠のいて……。

◇　◇　◇　◇

何やら周りが騒がしい。
「ジジ、疲れておるじゃろう。私が代わってやるのじゃ」
あぁ、これはドロテアさんの声かぁ。
「いえ、ドロテア様もお疲れですので、私が交代します」
これはアンナさんかな？
「ピピもするの！」
ふふふっ、ピピは相変わらず元気だなぁ。
「私が代わりましょうか？」
んっ、バルドーさんまで？　みんななんの話をしているのかな？
そして、段々頭が冴えていき、今の自分の状況を思い出す。
膝枕ぁーーーーー！
慌てて起き上がり、周囲を見回すと、全員が俺に注目しているのが分かる。
ドロテアさんが言う。
「なんじゃ、テンマが起きてしまったではないか」

「皆さんが騒ぐからです！」
ジジは少し怒っているようだ。
内心恥ずかしかったが、俺はそれを隠しつつ、ジジにお礼を言う。
「ジジ、ありがとう。驚くほど疲れが取れたよ」
「いえ、テンマ様のお役に立てたのなら、私も嬉しいです」
うん、ほんまにええ娘やぁ～！
周りから生温かい視線を感じるが、無視だ無視！
するとジジが立ち上がろうとして――よろけてしまう。
俺は彼女を抱きとめる。
それを見て、ドロテアさんが言う。
「だから言ったのじゃ。朝からずっと膝枕していたから、足が痺れたのじゃろう」
朝からって……一体、今は何時なんだ？
生活魔術のタイムで時間を確認すると、なんと夕方になっていた。
ジジをソファにもう一度座らせ、回復魔法で足の痺れを取ってやる。
「あ、ありがとうございましゅ」
やはりジジは可愛ええなぁ～！
「次は私の番なのじゃ！」

「つぎはピピ～！」
「私にお任せ下さい！」
ドロテアさんとピピ、そしてバルドーさんが再度参戦表明してきた。
「もう十分にジジに休ませてもらったので、大丈夫ですよ！」
俺がそう言うと、ピピが頬を膨らませる。
「う～、ピピも～！」
「じゃあピピはシルと一緒に、今晩俺と寝てくれるかな？」
「うん、いっしょにねる～！」
うんうん、癒されるなぁ。
それを見ていたドロテアさんとバルドーさんが参戦しようとしているのに気付き、俺は先に釘を刺す。
「でも、残りの二人はお断りします！」
ドロテアさんがあわあわしているが、気にせず夕食に向かう。
爆睡して昼を食べ損なったので、本当にお腹が空いていたのだ。

◇　◇　◇　◇

立ち読みサンプル
はここまで

翌朝も、気分良く目を覚ます。
昼に寝ていたので寝られるか心配だったけど、シルと一緒にピピを挟んで横たわっていると、すぐに夢の中だった。
ジジが言う通り、思った以上にこの数ヶ月は無理をしていたのかもしれない。
作業もそうだが、人間関係が複雑化したことにより精神的に疲れていたのだろう。
前世では一人でいることが多く、研修時代は完全に一人きりだったし。
朝食を食べてから、中継地を出発し、馬車を走らせる。
今俺はジジと……なぜかアンナさんに挟まれながら御者台に座っていた。
残りのみんなは、馬車の上に座ってトンネルを物珍しそうに眺めている。
一時間ほど進むと、トンネルまで到着した。
みんなが感嘆の声を上げているから自慢したくなるが、説明するとキリがないので我慢する。
穴を掘っただけでなく、全面を土魔術で石畳にしつつ綺麗にしてあるし、幅も余裕を持って作ったから、馬車がすれ違えるようになっているんだよなぁ。
とはいえ三十メートルしかないので、すぐに出口だ。
このトンネルの先にも、俺が力を入れて作った物がある。